

修 士 学 位 論 文

題 名 姿勢の上下と「目」の有無が

顕在および潜在自尊感情に与える影響

頁 1 ～ 40 頁 40

指導教員 沼崎 誠

平成 28 年 / 月 12 日提出

人文科学研究科 人間科学 専攻 心理学

学修番号 1386 1102

ふりがな 氏 名 おさ い けい かつ
落合 春一

目 次

| | |
|------------------|----|
| 研究関心 | |
| 上/下のメタファー | 3 |
| 上/下と身体性 | 4 |
| 「目」の存在の影響 | 5 |
| 本研究の仮説 | 6 |
| 本研究 | |
| 計画 | 7 |
| 手続き | 7 |
| 従属変数 | 8 |
| 実験 1 | |
| 結果(実験 1a) | 11 |
| 結果(実験 1b) | 15 |
| 考察 | 16 |
| 実験 2 | |
| 結果 | 20 |
| 考察 | 20 |
| 実験 3 | |
| 結果 | 23 |
| 考察 | 24 |
| 総合考察 | |
| 潜在自尊感情と顕在自尊感情 | 27 |
| 男性と女性(ジェンダー差) | 29 |
| その他に関連する可能性のある要因 | 29 |
| 将来の研究について | 30 |
| 謝辞 | 32 |
| 引用文献 | 33 |
| Appendix | 37 |

研究関心

上から目線、という言葉がある。近年生まれた新しい慣用句であり、その意味は『大辞泉【第二版】(松村明監修、2012、小学館)』によると、次の通りだという。

“上から目線”

俗に、人に対して露骨に見下した態度を取ること。また、組織の上の者が下のことを理解しないで考えを押しつけること。

(『大辞泉【第二版】 上巻・あ～す』(松村明監修、2012、小学館) より引用)

表面上の意味を単純に解釈すれば、「物理的に高い位置から視線を送る」程度の意味でしかない。しかし、この表現を使用することで、更に「他人を侮る、馬鹿にする」といったニュアンスが加わるのである。いわゆる比喩表現の一つであり、ここでは「上」という言葉が「地位や能力の高さ(あるいは、その高低差)」を象徴的に表している。メタファーといわれるもののひとつである。

この「上から目線」という言葉自体は新しい表現であるものの、日本語には「上/下」という言葉で「能力や地位の差」を表す比喩が数多く存在する。たとえば、上記の説明文中にある「見下す」や、反対に「上を見る」という意味をベースに「尊敬する」という意味も含まれる「仰ぐ」、さらには「上には上がいる」「他人の上に行く」といった慣用句などが挙げられるだろう。このように、「上から目線」という表現の登場以前から、本来物理的な垂直状態を表すだけの意味でしかない「上/下」という言葉は、日本語において、「能力や地位」といった概念を比喩的に表現するメタファーとして用いられているのである。

このような「上/下」のメタファーは日本語に限った話ではない。たとえば、英語の前置詞「up」には、「地位や成績が良くなる」「対戦相手よりも勝る」といった意味合いが存在している。独語の副詞「oben」は「上に、上の方に」という物理的な意味が基本だが、「地位が上の方に」という比喩的な意味も存在している。わずかに3つの例ではあるものの、これらのことを踏まえると、「上/下」＝「能力や地位」のメタファーというのは特定の言語や文化に限らず、普遍的に人間の頭の中で結び付けられているのではないか、という可能性も考えられるだろう。「上/下」に「能力や地位」の意味を加えて表象することは、何らかの言語や文化に規定されたものではなく、人間の物理的知覚による感覚と直接的に結びついているかもしれない、ということである。

これらの表現は文化・言語的な規定によるメタファーなのか、あるいは人間の知覚経験そのものに由来するものなのか。これら2つ視点の関係性が、近年の実験・認知系社会心理学で盛んに研究されている。身体の状態と心の状態の相互作用や、概念的メタファーがそれらの結びつきとどのように関わっているのか。そして、それぞれがどのように知覚、認知、判断、行動に影響を及ぼすのか、幅広い領域での検証が進んでいる。身体と心の相

相互作用関係は「身体性」、あるいは「身体化された認知 (embodiment cognition)」と言われ、近年、特に関心を集めている分野である。

身体性研究の古典的代表的例としては、Wells & Petty. (1980) の「頷く」動作の研究が挙げられるだろう。「頷く」という言葉は「首を上下に振る」といった動作そのものの表現である他に、「同意する」といった意味が存在している。そこで、実際に首を上下に振って頷いてもらいながら、説得のメッセージを参加者に聞いてもらったところ、首を横に振りながら同じメッセージを聞いた場合に比べて、その内容を好意的に評価したという結果となった。すなわち、首を縦に振る動作が「頷く」という言葉の意味に沿う形で、メッセージの評価や自身の態度に影響を与えたのである。このように、身体の置かれている状況や実施中の動作によって、認知・感情・態度・行動などが変化するかどうかを検証するのが、身体性研究である。

本研究では、冒頭で示した「上から目線」が実際に発生しうるのか、それを身体性とメタファーの観点から心理学的に検討することを目的の一つとする。すなわち、自分よりも高い位置から他者の目線を受けた時、自分の能力を侮られたように感じ自信を無くすのか、という点を、実験を通じて検証する。今回の研究では、自分自身にどの程度価値を置き、自信を持っているのかという概念である「自尊感情 (self-esteem)」を対象として実験を実施する。また、「上から目線」だけでなく、単純に「上/下を向く姿勢」がどのような影響を与えるか、その検証も併せて行う。「うなだれる」という言葉にある通り、「下を向く」動作には気分の落ち込みや自信の喪失といった意味が含まれることが考えられる。また、「胸をそらす」といった言葉が示す姿勢のように、自信がある時には上の方角を見ることが多いとも言えるだろう。よって本研究では、「上/下を向く」ことで「自信がある/ない (自尊感情が高い/低い)」ように感じやすくなるか、また更にその先に「目」があることで「見下ろされる/見上げられる」状態となり、それによって「自信がない/ある (自尊感情が低い/高い)」ように感じやすくなるか、という二点の検証を目的として設定する。

本論文は以下のような構成をとる。まず、「上/下」のメタファーに関する研究、身体性に関する研究、および視線や目の存在に関する研究をレビューする。次にそれらをまとめて本研究の仮説を述べた後、その検証を行った4つの実験を紹介し、その結果の記述、および考察を行う。

上/下のメタファー

地位や能力に限らず、「上/下」という概念は様々なものを指し示すメタファーとして用いられている。Lakoff & Johnson. (1980) でまとめられた中では、幸福 (happy) と悲しみ (sad)、健康 (health) と病気 (sickness)、命 (life) と死 (death)、美德 (virtue) と墮落 (depravity) なども挙げられている。また、それぞれの概念がどのように「上/下」と関わっているかについても、様々な実証的研究が行われている (see a review; Landau, Meier, & Keefer, 2010)。たとえば、パソコンの画面の中で、ポジティブな単語は上側、

ネガティブな単語は下側に呈示された方が、それぞれ反応が速い（上＝良い good / 下＝bad; Meier & Robinson, 2004）という結果や、同様に「神」関連の単語は上側、「悪魔」関連の単語は下側である場合により反応が速く、また、上側に呈示された人はより信心深いといった対人認知が生じる、ということも分かっている（Meier, Hauser, Robinson, Friesen, & Schjeldahl, 2007）。

社会的な地位と「上/下」についての研究としては、Schubert. (2005) の実験がまず挙げられる。上記の実験と同様、PC ディスプレイの上側（vs. 下側）に社会的地位カテゴリーを呈示する実験を行ったところ、高地位カテゴリーについてのみではあるものの、上側に呈示した時の方が下側に呈示した時よりも反応が有意に速い、という結果が得られている。この反応速度の差は、社会的な地位の高さと物理的・空間的な高低が、頭の中で関連付けられて表象されていることに由来すると解釈される。また、Giessner & Schubert. (2007) では、組織の模式図を用いて同様の検証を行っており、上司を示すアイコンと部下を示すアイコンを結ぶ垂直線が長い（距離が遠い）ほど、上司について地位が高いと知覚することが示されている。

このように、知覚や認知レベルにおいて、「上/下」と「能力や地位の高低」の結びつきを示す研究結果が既にいくつも発表されている。今回の研究では、自信および自尊感情を対象としている。「上/下」と自尊感情の直接の関連を示した研究は、筆者の知り得る限り見つかっていない。しかし、「良い/高地位」が「上」と、「悪い/低地位」が「下」と結びついていると判明していることから、「上」が「高い自尊感情（自信がある）」と、「下」が「低い自尊感情（自信がない）」と、それぞれ結びついていると推測できるだろう。

上/下と身体性

Schubert. (2005) の実験は知覚レベルの話であるが、身体性による社会的地位への影響についての実験結果も、同様にいくつか存在している。

Stepper & Strack. (1993) では、人間工学的な実験と称して、課題を行うときの教示や机の高さを変えることで、実験中の参加者の姿勢と視線の向きを操作している。通常通りの姿勢や机の状況で課題を行う統制条件のほかに、直立した姿勢で課題を行うように教示された直立姿勢条件と、教示は何も行われなかったものの、課題を実施する机の高さが参加者の座る椅子よりも低くしてある俯き姿勢条件が準備された。結果、参加者が呈示された形容詞についてどの程度感じるかを回答するとき、俯き姿勢条件の参加者の方が、直立姿勢条件の参加者に比べて自信を持てなかった（形容詞は“proud”）、という結果が示されている。また、Carney, Cuddy, & Yap. (2010) では、勢力姿勢（power posture）というものを扱うことで、ホルモン分泌やリスク行動、主観的な有能感への影響を検討している。身体が「大きく開いている（expand and openness）」ような高地位姿勢を取った参加者は、身体が縮こまっている低地位姿勢を取った参加者に比べて、高地位に関連するホルモンが多く分泌され、リスク志向的な行動をとりやすくなり、主観的な有能感が上昇する、とい

う結果が得られている。さらに、Bohns & Wiltermuth. (2012) では、身体を開く高地位姿勢を取った方が痛みへの耐性が高いという結果と、勢力姿勢は相互作用相手との相補性が存在するという結果が出ている。すなわち、相互作用相手が高地位姿勢を取った場合、そうでない場合に比べて参加者はより従属的に振る舞う、というデータが示されている。このように、身体の姿勢の操作によっても、社会的地位や関連する態度、自己認知、行動指標等が変化することが、先行する研究によって判明しているのである。

今回の研究においては自尊感情を扱うが、これは Carney et al. (2010) の研究における主観的有能感と、類似の概念であると考えられる。よって、「上」を向くような開いた姿勢は「高い自尊感情（自信がある状態）」を導き、一方、「下」を向くような閉じた姿勢は「低い自尊感情（自信がない状態）」につながるだろうと推測される。また、今回の研究では、自己報告的な顕在自尊感情 (explicit self-esteem) だけではなく、意識ではアクセスすることのできない潜在自尊感情 (implicit self-esteem) も同時に扱う。これらの関係については議論があるものの、本研究では「一般的な関連性がある (e.g., Hofmann, Gawronski, Gschwendner, Le, & Schmitt, 2005)」という立場を採用し、潜在自尊感情においても顕在自尊感情と同じ仮説を立てて検証を行うこととする。

「目」の存在の影響

人は他人の目を意識する動物であるといわれる。人間社会は縦横問わず密接な人間関係の基に成り立っており、それを維持する必要があるからだと考えられている。他人の存在が影響をもたらすことを示す研究結果は、心理学において数多く存在しており、たとえば、他人に自分の良い印象を持ってもらおうと、自らの振舞いを意図的に調整することが分かっている (自己呈示 : Leary, Kowalski, 1990; Baumeister, 1982)。

また、他者との関係を自尊感情の観点から見た理論に、ソシオメーター理論 (sociometer theory; Leary, 1999a, 1999b; Leary & Baumeister, 2000; Leary & Downs, 1995) がある。この理論では、周囲から受容されているか、あるいは拒絶されているかをモニタリングする指標として、自尊感情をとらえている。受容されているという社会的な手がかりを得ると、周囲との人間関係が上手く言っているというシグナルとして自尊感情が上昇し、逆に拒絶の手がかりを得ると、危機的状态を示すために自尊感情が低下する。このように、社会的な関係性を維持するためのメーターとして自尊感情が機能している、というように考えるのである。この理論は人の「目」の手がかりに関する研究と関連付けられて述べられることがある。たとえば、こちらをまっすぐ見る視線に比べて、逸らされた視線は排他的な扱いを受けたという感覚が生じ、顕在および潜在自尊感情が減少するという研究が存在している (Wirth, Sacco, Hugenberg, & Williams, 2010)。また、社会的な排除と姿勢の関連を検討した研究も存在しており (Welker, Oberleitner, Cain, & Carré, 2013)、高地位的な姿勢を取った時の方がより排除の影響を受けやすく、気分がネガティブになり、心理学的な基礎的欲求が低下することが示されている。

人の「目」の影響は、実際の人の「目」だけの話ではない。現実には存在する他人によって「見られている」状態でなくても、「見られている」という手がかりが存在しているだけで、人は見られているように振る舞うという研究結果も存在している。Haley & Fessler. (2005) では、人の目をモチーフとした図形が PC 画面上に呈示された参加者の方が、他の参加者に渡す報酬を配分する独裁者ゲームにおいて、より利他的な配分を行ったという結果が示されている。また、Jones, Nettle & Bateson. (2011) の研究では、大学のカフェテリアに人の「目」の画像を貼り付けると、利用者の行動が利他的になるという結果が示されている。人の「目」の画像は、自分が良い評価を受け将来に見返りを受ける期待を無意識のうちに高めている、ということも分かっており (Oda, Niwa, Honma, & Hiraishi, 2011)、他者との関係に関して、評価に応じた感情や行動を生じさせることが示唆されている。

本研究では、人の「目」を模した図形を用いて、「見上げられている/見下ろされている」という感覚の影響を検証する。「上を向く」姿勢の先に「目」が存在した場合、その「目」に「見下ろされている」状態となるため排除的な感覚が生じ、自尊感情が低くなるのではないかと推測される。また、「下を向く」姿勢の先に「目」が存在した場合は、その「目」に「見上げられている」状態となるため受容的な感覚が生じ、自尊感情が高くなるのではないかと推測される。先述した「上/下」と「高地位/低地位」のメタファーの観点からも、「目」と比較して「(自分が) 下/上にいる」という関係となるため、メタファーを通じて地位の感覚が変化することで自尊感情に同様の影響を及ぼす可能性も考えられるだろう。

本研究の仮説

以上の先行研究を踏まえて、本研究では以下の仮説を立てる。1) 下を向いた参加者に比べて、上を向いた参加者の方が、より自分に自信があるように感じやすくなる (=自尊感情が高くなる) だろう。2) 参加者の視線の先に「目」がある場合、上を向くとその「目」に見下ろされている状態となるため、下を向いている (=「目」から見上げられている or 「目」を見下ろしている) 場合よりも自信がない (=自尊感情が低い) と感じやすくなるだろう。Stepper et al. (1993) では、形容詞 (“pride”) をどの程度感じるか、Carney et al. (2010) では自己報告的な有能感等を検討していたことを踏まえ、本研究では関連性の考えられる概念である自尊感情への影響を検討する。また、自分で自覚することのできる自尊感情である顕在自尊感情と、自覚することのできない半意識的な自尊感情である潜在自尊感情の両方について検証を行う。姿勢については、Matsuzaki, Numazaki, Hirama, Ichinose, & Ochiai. (2013) で用いられた、椅子の背もたれと課題実施用の PC ディスプレイの位置を動かす操作をそのまま用いた。「目」の操作については、「目」を模した図形を課題実施中にディスプレイへ表示させることで操作を行った。この「目」がない場合は1) の結果が、「目」がある場合は2) の結果が、潜在・顕在それぞれの自尊感情において、同様に生じると予測される。

本研究

本研究では、「姿勢の向き」と「目の有無」によって自尊感情がどのような影響を受けるかについて、4つの実験を通して検討を行った。すべての実験は実験室において、実験者1人と参加者1人の個別実験の形式で行われた（実験1bは2人の実験者が分担して実施した）。参加者は実験の簡単な説明を受けた後、課題用の椅子に座り、PC上で2つのテンキーにより回答する形式の課題を行った。この椅子と課題用のPC画面の位置によって、参加者の姿勢が操作された。課題では、潜在および顕在の自尊感情を測定し、条件ごとによる比較検討を行うことで、仮説の検証を実施した。

実験1では姿勢の違い（上向き vs. 下向き）、および目を加えることによる更なる違い（見上げられている（or 見下ろしている） vs. 見下ろされている）が生じるかを検討した。また、実験1aでは実験者が参加者の見えない位置（参加者の後ろ側）にまで下がるだけであったが、実験1bでは実験者自体の「目」の効果を排除するため、実験者がパーテーションの向こう側にまで移動し、参加者は課題中1人きりの状態で実験に参加した。実験2では、実験1の結果を踏まえ、この結果が「姿勢の違い」による効果なのか、あるいは「視線の向きの違い」「見上げられる/見下ろされることそのもの」による効果なのかを区別するために、姿勢を固定して「視線の向き（or 目の位置）」のみの操作による比較検討を探索的に行った。実験3では、実験2の結果を踏まえ、実験1で生じた結果が「上向き（vs. 下向き）の姿勢を見られている」ことによるものなのかを検討するために、実験1とは異なる方法による「目」の操作を用いて仮説の検証を行った。

計画

独立変数

姿勢：上向き vs. 下向き（vs. 正面向き（実験2のみ）） …参加者間

「目」：目有 vs. 目無 …参加者間

カウンターバランス

課題順番：潜在課題先 vs. 顕在課題先 …参加者間

従属変数

単語のカテゴリ分類課題：IAT …潜在自尊感情測定

質問課題：尺度 …顕在自尊感情測定

手続き

実験の約数か月前に、Rosenbergの自尊感情尺度（Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成、1982）を含むバッテリーテストに回答させた。逆転項目を処理した後、数値が高いほど自尊感情が高いという形式で平均値を算出して、参加者ごとに得点化を行った。

本実験は実験室にて個別形式で行われた。参加者は実験者から実験の簡単な説明を受け

た後、課題用の椅子に移動した。参加者は「背もたれに背中をつけて座ってください」という教示を受け、脚が床につくように高さの調節を行った。椅子の調整が終わった後、実験者から課題に関する説明を受けたが、この時「なるべく画面を見ながら回答する」ように指示された。課題は全て、必要のないキー（”4”と”6”（回答用。それぞれ”左””右”と表記されたシールつき）と”0”（課題説明時、次の画面に進むためのキー）以外のキー）を全て取り外したテンキーによって回答した。最初に姿勢、および回答方法に慣れるために、練習用の知識課題（○（”4”）か×（”6”）で回答、全 5 問）に回答した。その後、実験者は「以降の課題は説明も全てモニターに表示される」「実験者は後ろにいますので、何かあったら遠慮なく声をかける」という点を説明して、参加者の後方に下がって待機した（Fig. 1）。その間、参加者は自分のペースで単語のカテゴリー分類課題と質問課題に回答した。単語のカテゴリー分類課題と質問課題の順番は参加者間でカウンターバランスをとった。課題終了時、画面に表示された指示に従って参加者は実験者を呼び、ディブリーフィングを行った後に実験を終了した。

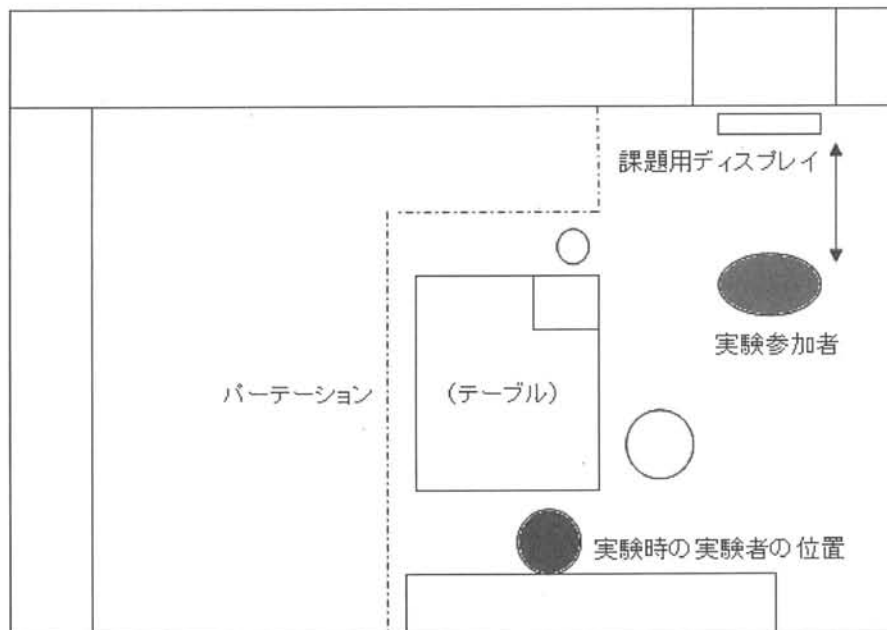


Fig. 1：本研究における実験室内の模式図（実験 1b を除く）

従属変数

単語のカテゴリー分類課題

自尊感情 IAT (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を実施した。ポジティブ語・ネガティブ語には、石井・沼崎 (2011) で用いられたものと同じ刺激を用いた（ポジティブ語：輝かしい、元気、笑い、見事な、平和/ネガティブ語：痛ましい、ひどい、恐ろしい、苦悩、失敗）。自己関連語は、“私は”、“私の”、“自分は”、“自分と”、“私と”、の 5 つ、およびフィラーとして、“自分の”、の計 6 単語を用いた。他者関連語には、“他人は”、“他人と”、“他人の”、“他者”、“他者は”、およびフィラー用に、“他者の”、の計 6 単語を使用した。

ブロックは以下のように構成されていた。まず、①ポジティブ語を左側に（”4”キーで回答）、ネガティブ語を右側に（”6”キーで回答）分類する練習ブロック（10 試行）、次に②自己関連語（左側、”4”キー）と他者関連語（右側、”6”キー）を分類する練習ブロック（11 試行）、③自己関連語・ポジティブ語を左側に分類する練習ブロック（20 試行）を行い、④同様の分類での本番ブロック（21 試行）を実施した。その後、カテゴリーの向きを反転させ、⑤他者関連語を左側（”4”キー）、自己関連語を右側（”6”キー）に分類する練習ブロック（11 試行）を行った後、⑥他者関連語・ポジティブ語を左側に分類する練習ブロック（20 試行）を挟んでから、⑦⑥と同様の分類による本番ブロック（21 試行）を行った。全ての参加者は、この順番で 7 つのブロックを実施した。また、全ての試行では 490ms 間注視点（もしくは注視点と刺激用目）が呈示された後、10ms のブランクを挟んでから単語が呈示された。

質問課題

顕在自尊感情を調べるために、3 つの尺度の尺度項目を全てランダムにして呈示した。尺度には Rosenberg の自尊感情尺度 10 項目 (Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982)、特性的自己効力感尺度 23 項目 (Sherer, Maddux, Mercandante, Printice-Dunn, Jacobs, & Rogers, 1982; 成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)、Janis & Field の尺度 23 項目 (Janis & Field, 1959; 遠藤・安藤・冷川・井上, 1974) を用いた。回答は、質問項目が「(自分に) 当てはまる」と思うならば左（”4”キー）、「当てはまらない」と思うならば右（”6”キー）を押す形式とした。また、この形式で回答できるように、尺度項目の文章を一部変更した (Appendix)。全ての試行では、単語のカテゴリー分類課題と同様、490ms 間の注視点（もしくは注視点と刺激用目）と 10ms のブランク後に質問項目が表示された。

得点化

IAT は本番ブロックの反応時間を用いて分析を行った。300ms 未満、3000ms 以上の極端反応、および誤答を除外した後、対数変換を行いそれぞれのブロックごとに平均値を算出した。そして、他者・ポジティブブロック平均から自己・ポジティブブロック平均を引いて、数値が高い程、潜在自尊感情が高くなる方向で得点化した。質問課題は、「当てはまる」と回答する程、顕在自尊感情が高くなる方向に逆転項目を処理した後、「当てはまる」と回答した数を用いて分析を行った。

実験 1

姿勢と目の有無による自尊感情への影響を検討した。姿勢は「上を向く」条件と「下を向く」条件に分かれており、課題を表示する PC 画面の位置と、参加者が座る椅子の背もたれの向きによって操作を行った。また、半分の参加者には、課題で表示される注視点と一緒に「目」を模した図形を呈示することで、目の有無条件の操作を行った。どちらの条件も参加者間であり、参加者は 4 つの条件のいずれかで課題を実施した。また、実験中、実験者は参加者から見えない場所で待機していたものの、実験 1a では参加者と同じ空間に居たのに対して、実験 1b では実験者の視線の影響を完全に排除する為に、パーティションで区切られた場所にまで移動して完全に参加者が見えない状態で実験を行った。

仮説としては以下の 2 つとなる。1) 目が無い場合では、上を向いて課題を実施した参加者の方が下を向いて課題を実施した参加者よりも、潜在・顕在ともに自尊感情が高くなるだろう。2) 目が有る場合ではこの逆となり、下を向いて課題を実施した参加者の方が(=見上げられている or 見下ろしている)上を向いて課題を実施した参加者よりも(=見下ろされている)、潜在・顕在ともに自尊感情が高くなるだろう、と推測される。

参加者

実験 1a

首都大学東京の学部生 47 名(女性 33 名)が実験に参加した(平均年齢 19.120 歳($SD = 0.931$))。また、そのうち事前に質問紙へ回答していたのは 43 名(女性 31 名)であった。一般教養の講義『心の科学』の時間内にて、実験に参加することで授業の評価に加点されるという条件で募集が行われた。

実験 1b

首都大学東京の男子学部生 45 名が実験に参加した(平均年齢 19.610 歳($SD = 1.464$))。また、そのうち事前に質問紙へ回答していたのは 38 名であった。一般教養の講義『心の科学』の時間内にて、実験に参加することで授業の評価に加点されるという条件で募集が行われた。

条件

姿勢 (1a、1b 共通)

姿勢の違いは、①参加者の座る椅子の背もたれ、および②課題用ディスプレイの位置、によって操作された (Fig. 2)。上を向く条件の場合、椅子の背もたれは大きく後ろに倒され、課題用ディスプレイは棚の上の方に置かれた。一方、下を向く条件の場合は、椅子の背もたれは垂直よりも内側に倒され、課題用ディスプレイは床の上に置かれた。なお、ディスプレイと参加者の距離は、条件間で違いが出ないように椅子の位置を調節した。

目（1a、1b 共通）

目の操作は注視点によって行った（Fig. 3）。目が無い条件では、注視点として“+”のみを画面に呈示したが、目が有る条件では“+”に加えて、目に見えるような◎の中の○を黒く塗りつぶしたような記号を 2 つ、併せて呈示した。

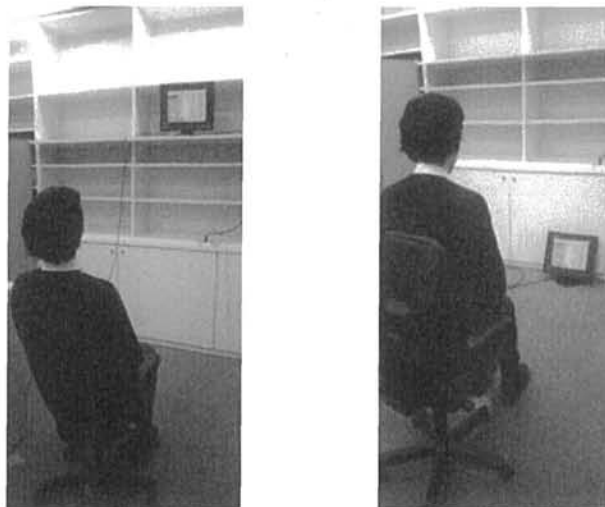


Fig. 2 : 姿勢条件（右：上条件、左：下条件）



Fig. 3 : 目有条件の場合の注視点（目無条件の場合は“+”のみ）

実験者の位置（1b のみ）

実験中での実験者の視線の影響を排除する為、実験 1b では実験者が参加者の見えない位置まで移動した（Fig.4）。知識課題の後、実験者は、以降の課題を画面の指示にしたがって自らのペースで行うことを告げると共に、パーテーションの向こう側を指し示して「仕切りの向こうにいるので何かあったら声をかけてください」と教示し、実験中は参加者一人の状態になることを強調した。その他の部分は実験 1a と同様の形で行った。

結果（実験 1a）

事前確認

分析に先立ち、自尊感情課題の順番の違いが何らかの影響を与えている可能性についての検討を行った。それぞれの従属変数に関して、課題の順番による独立した 2 群（潜在自尊感情課題先 vs. 顕在自尊感情課題先）の t 検定を行った結果、有意な差は見られなかった（ $ts > .560$ ）。そのため、以降は課題順を考慮に入れず分析を行った。

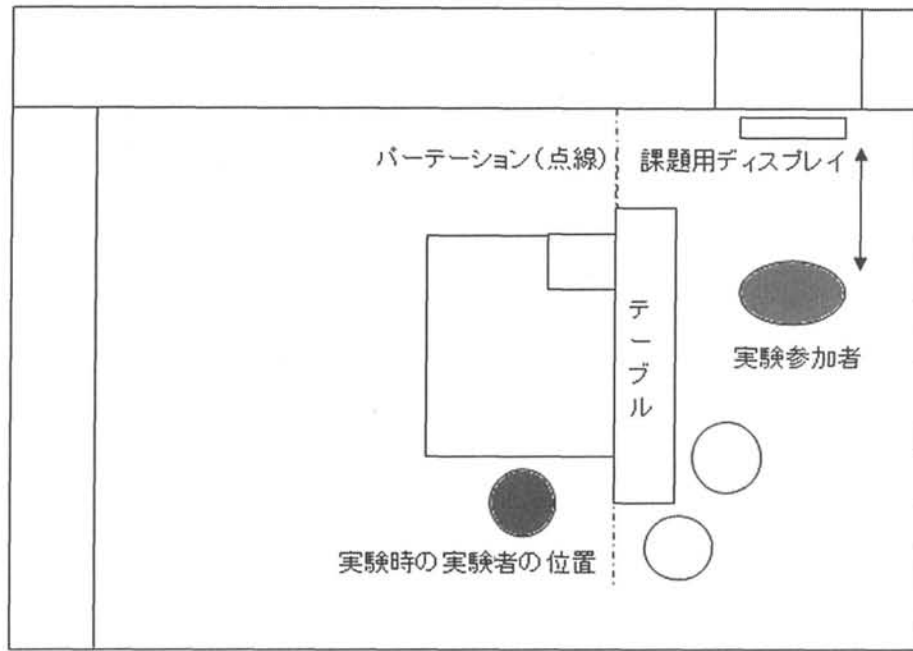


Fig.4 : 実験 1b における実験室内の模式図

IAT

事前に性別についての仮説は設けなかったものの、参加人数に性別の偏りが存在したため、性別を含めた 3 要因（性別×姿勢条件×目条件）の分散分析を行った。結果、性別の主効果（ $F(1, 39) = 4.025, p = .052, \eta^2 = .025$ ）および目条件の主効果（ $F(1, 39) = 3.543, p = .067, \eta^2 = .022$ ）が有意に近い結果になったものの、仮説で想定していた効果は見られなかった。男性（ $M = .267$ ）の方が女性（ $M = .183$ ）よりも数値が高く、目無条件（ $M = .248$ ）の方が目有条件（ $M = .202$ ）よりも得点が高い、という結果であった。

そこで、自尊感情の個人差も含めて検討するため、事前に回答させていた Rosenberg の自尊感情尺度得点を標準化して共変量とし、性別×姿勢条件×目条件×事前の自尊感情得点のすべての交互作用を含む一般線形モデルによる分析を行ったものの、性別の主効果（ $F(1, 26) = 3.734, p = .064, \eta^2 = .030$ ）および目条件の主効果（ $F(1, 26) = 3.472, p = .074, \eta^2 = .028$ ）が有意に近い形でほぼ同程度見られたのみで、その他に有意な結果を得ることはできなかった。各主効果のパターンに関しても、共変量を含める前の分析と同様の結果であった（男性： $M = .294$ 、女性： $M = .184$ 、目無条件： $M = .296$ 、目有条件： $M = .183$ ）。

質問課題

IAT と同様、性別×姿勢条件×目条件の分散分析を行った結果、姿勢条件×目条件の交互作用効果（ $F(1, 39) = 6.213, p = .017, \eta^2 = .015$ ）および性別×目条件の交互作用効果（ $F(1, 39) = 9.076, p = .005, \eta^2 = .022$ ）が有意になり、より上位の効果である性別×目条件×姿勢条件の交互作用が有意に近い効果（ $F(1, 39) = 3.183, p = .082, \eta^2 = .008$ ）となった。後続の検定の結果、まず姿勢条件×目条件の交互作用効果において（Fig. 5）、目有条件に

おける上条件 ($M = 18.500$) よりも下条件 ($M = 25.889$) の数値が大きいという結果が、有意傾向 ($p = .059$) ではあるものの示された。目有条件のみであるが、仮説に沿った結果であった。性別×目条件においては、男性では目有条件 ($M = 19.750$) よりも目無条件 ($M = 29.583$) が、女性では目無条件 ($M = 18.313$) よりも目有条件 ($M = 24.639$) が、それぞれ有意に得点が高かった (男性: $p = .036$ 、女性: $p = .037$)。また、目無条件における男女差においても、有意な差であることが示された ($p = .005$)。

3 要因の交互作用である性別×姿勢条件×目条件について後続の検定を行ったところ、女性の下条件における目有条件 ($M = 30.778$) と目無条件の差 ($M = 15.500$)、目有条件における下条件と上条件 ($M = 18.500$) の差、および、下・目無条件における男女差 (男性: $M = 31.500$) において有意な差が見られた ($p = .001, .005, .003$)。また、下・目有条件における男女差 (男性: $M = 21.000$) では、有意に近い差が見られた ($p = .088$)。全体としては、女性の目無条件における上条件 ($M = 21.125$) と下条件の間に有意な差が見られないものの、おおよそ仮説通りのパターンを示していた。一方、男性は仮説通りのパターンになっておらず (上・目無条件: $M = 27.667$ 、上・目有条件: $M = 18.500$)、全体的に目有条件に比べて、目無条件の数値が高くなる結果となった (Fig 6)。

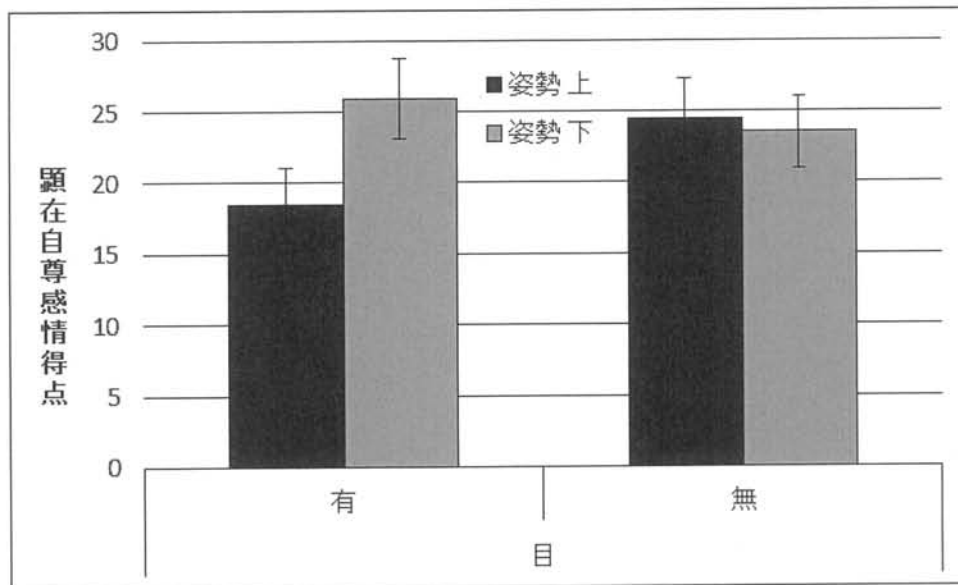


Fig 5: 質問課題における姿勢×目有無条件での分析結果 (推定値)

個人差も含めて検討するため、IATと同様、事前の Rosenberg 自尊感情得点を含めた一般線形モデルによる分析を行った。結果、事前の自尊感情得点の効果が有意になり ($F(1, 26) = 31.106, p = .000, \eta^2 = .048$)、性別の主効果で有意に近い効果が得られた ($F(1, 26) = 3.690, p = .066, \eta^2 = .006$)。更に、目条件の主効果が有意になったものの ($F(1, 26) = 5.940, p = .022, \eta^2 = .009$)、上位の目条件×姿勢条件の交互作用が有意になったため制限を受ける ($F(1, 26) = 6.070, p = .021, \eta^2 = .009$; Fig. 7)。性別の主効果に関しては、男性 ($M =$

28.396)の方が女性 ($M=22.435$) よりも得点が高いという結果であった。目条件×姿勢条件の交互作用に関して後続の検定を行ったものの、有意な差は一つも得られなかった ($p > .310$)。ただし、全体のパターンとしては仮説通りの結果が得られた。

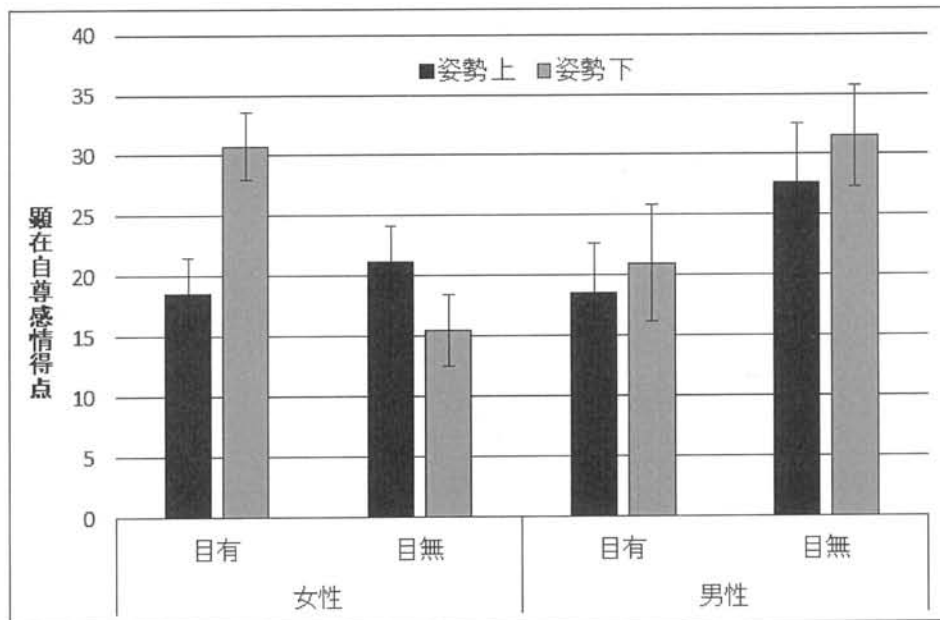


Fig 6: 質問課題における性別×姿勢×目有無条件での分析結果 (推定値)

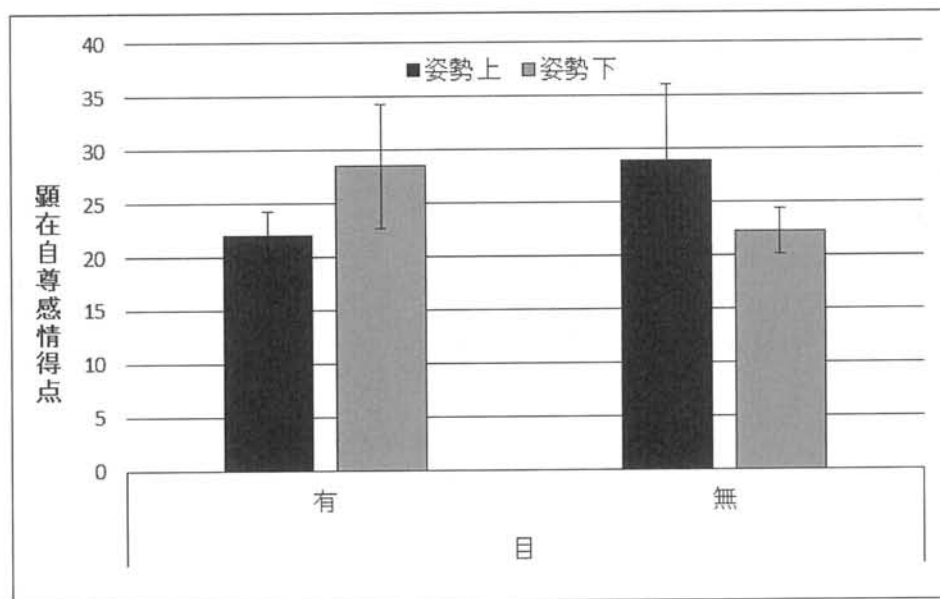


Fig 7: 質問課題における共変量を含む姿勢×目有無条件での分析結果 (推定値)

結果 (実験 1b)

操作チェック

分析に先立ち、自尊感情課題の順番と実験者 (2 名で分担して実施) の違いが何らかの影響を与えている可能性についての検討を行った。それぞれの従属変数に関して、課題の順番及び実験者による独立した 2 群 (潜在自尊感情課題先 vs. 顕在自尊感情課題先 / 実験者 1 vs. 実験者 2) の t 検定を行った結果、有意な差は見られなかった ($t_s > .545$)。そのため、以降は課題順及び実験者の違いを考慮に入れずに分析を行った

IAT

姿勢条件×目条件の分散分析を行なったところ、交互作用効果のみが有意傾向となった ($F(1, 45) = 3.148, p = .083, \eta^2 = .020$)。後続の検定を行なったところ、上条件における目無条件 ($M = .190$) と目有条件 ($M = .290$) の差、および目有条件における上条件と下条件 ($M = .185$) の差がそれぞれ有意傾向となったものの ($p = .092, .084$)、全体のパターンは仮説で想定していたものと真逆の結果となった (目無・下条件: $M = .235$ / Fig. 8)。

個人差も含めて検討するため、実験 1a と同様に事前の Rosenberg 自尊感情得点を含めた一般線形モデルによる分析を行なったところ、有意な効果は見られなくなった ($p_s > .142$)。ただし、全体のパターンは個人差を含める前の結果と変わらず、目無条件については上条件 ($M = .191$) と下条件 ($M = .191$) に差がない一方で、目有条件については、上条件 ($M = .303$) の方が下条件 ($M = .168$) に比べて数値が大きい、という結果であった。

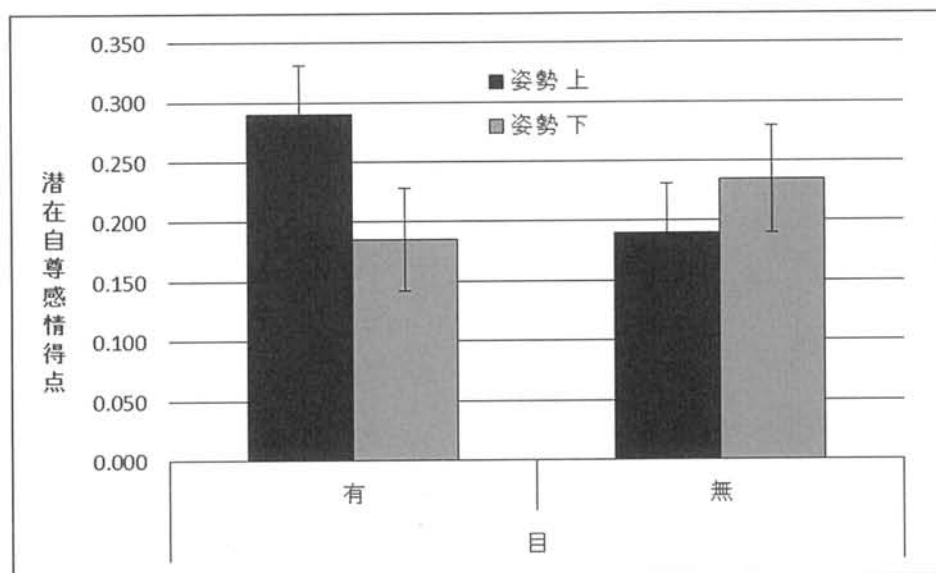


Fig. 8: IAT における姿勢×目条件での分析結果 (推定値)

質問課題

姿勢条件×目条件の分散分析を行なったものの、有意な効果は見られなかった ($p s > .110$)。また、個人差も含めて検討するため、IATと同様に事前の Rosenberg 自尊感情得点を含めた一般線形モデルによる分析を行なったところ、事前の自尊感情得点の効果が有意となり ($F(1, 30) = 14.175, p = .001, \eta^2 = .027$)、目条件の主効果が有意傾向となった ($F(1, 30) = 3.720, p = .063, \eta^2 = .007$)。目無条件 ($M = 27.817$) の参加者の方が、目有条件 ($M = 22.631$) の参加者よりも、顕在自尊感情得点の高い傾向がある、という結果であった。

考察

一部ではあるが、仮説が支持される結果となった。顕在自尊感情においては予想された交互作用効果が生じており、目が有る場合について、上を向いた姿勢 (= 見下ろされている状態) よりも下を向いた姿勢 (= 見上げられている状態) の方が、有意傾向ではあるものの自尊感情が高くなる、という結果となった。また、個人差を踏まえた分析を行なっても予想された交互作用効果が生じており、後続の検定は有意でないものの、目が無い場合では上を向く姿勢の方が、目が有る場合では下を向く姿勢 (= 見上げられている状態) の方が、それぞれ自尊感情が高くなる結果となった。

ただし、この効果は実験 1a では生じているものの、実験 1b では確認することができなかった。その理由としてはいくつかの原因が考えられる。まず、実験 1a と 1b の最大の違いとして挙げられる「実験者の目」の影響であろう。今回の研究で用いた「目」の図形はかなり曖昧なものであるため、単体では「目」としての影響が生じにくい可能性がある。

「目」の図形だけではなく、実験者の存在を直接見えなくとも感じることで、呈示した図形が「目」として初めて機能する、と考えられる。また、実験者がいなくなったことで、姿勢の統制が崩れやすくなったことも原因として挙げられるだろう。姿勢の操作については、Carney et al. (2010) 等のように厳密な教示による統制を行なっておらず、実験 1b の参加者が姿勢を維持していたかどうかについて、確認を取ることができていない。ただし、実験 1a (男性参加者) と実験 1b について、「目」が顕在自尊感情に与える効果の方向は一致しているため¹ (目無条件 > 目有条件)、実験者の有無によって効果の“方向”が変化したとは考えにくく、単純に効果が弱まったと考えるのが妥当であろう。

また、実験 1a と 1b の結果の違いからは、性別によって違う影響が生じた可能性も考えられる。実験 1a の分析では性別を含む 3 要因の交互作用効果が、有意傾向ではあるものの生じており、女性は仮説通りの結果になっているが男性は仮説通りのパターンではないことも、実験 1b の結果と一致すると言える。ただし、実験 1a のその後の分析では、個人差の影響を調整すると 3 要因の交互作用が消え、目×姿勢の 2 要因の交互作用は残るとい

¹ 実験 1a (個人差を含む分析) : 目無条件 ($M = 31.843$) > 目有条件 ($M = 24.950$)
実験 1b (個人差を含まない分析) : 目無条件 ($M = 26.834$) > 目有条件 ($M = 22.243$)

う結果も出ている。すなわち、上記の性差は男性参加者の人数が少ないことによる個人差の影響の可能性も否定しきれない。個人差を含む分析では2要因の交互作用が仮説通りのパターンとなっており、これらの研究結果の比較だけで結論を出すことは難しいだろう。

一方、実験 1a・1b 通じて、潜在自尊感情では仮説で想定された効果が生じなかった。特に、実験 1b では目有・下条件において、仮説とは逆の方向である自尊感情が高くなる傾向が見られた。実験 1a の男性参加者における潜在自尊感情（共変量を含まない分析）も、交互作用効果こそ見られていないが実験 1b と同様のパターンとなっており²、ある程度一貫する結果であると考えられる。

また、実験 1a の顕在自尊感情については仮説通りの結果が出ていることから、潜在自尊感情と顕在自尊感情では、姿勢と目の影響が違う形で生じる可能性が考えられる。姿勢に関する先行研究（e.g., Stepper et al., 1993; Carney et al., 2010）は基本的に自己報告式の尺度（＝顕在尺度）であり、これらの結果は実験 1a における顕在自尊感情の結果と概念的に一致している。一方、潜在自尊感情については、目無条件では差が生じず、目有条件では仮説と逆の効果（上向きの姿勢＝見下ろされている状態＞下向きの姿勢＝見上げられている状態）が発生する傾向が見られている。よって、少なくとも潜在自尊感情における姿勢の影響は「姿勢のみ」では生じず、目との組み合わせによって初めて発生すると考えられるだろう。自尊感情の個人差を統制した分析を行なうと効果が消えてしまうことから、個人差の影響は決して無視できないものであるものの、顕在自尊感情とは異なるプロセスや効果が発生しているかもしれないと推測できる。

実験 2 以降では、この潜在自尊感情の結果について、特に検証を行う。すなわち、潜在自尊感情で当初の仮説と違う効果が生じた原因について、探索的に検討を行うことを目的とする。まず、以降の検証を進めやすくするために、この自尊感情の条件差が「視線の向き」の操作によるのか、「見上げられている/見下ろされている状態」の操作によるのか、あるいは「姿勢の向き」の操作によるのか、その区別を明確にするための実験を行うこととした。実験 1 による操作では、参加者自身の身体に対する影響と、単なる視線の向き、および「目」の位置のどちらもが同時に操作されている。たとえば Schubert. (2005, Study 4) では、PC 画面内での単語の呈示位置だけを操作するだけで、地位に関する活性化の違いが生じるという結果となっている。実験 1 の結果も、このように単純な視線の向き（＝「上/下」メタファーの操作。ここでは課題用 PC ディスプレイの上下位置）によって、効果が発生している可能性が考えられる。また、単純に「目」が呈示される位置、すなわち想定される架空の「相手」が自分よりも上にいるか下にいるかのみによって（＝見上げられている/見下ろされている状態の違い）、これらの自尊感情における効果が生じたという説明も可能である。あるいは、Carney et al. (2010) 等の先行研究と一致するように、姿勢の操作こそが効果の違いを生じさせるとも考えられるだろう。

そこで、まず実験 2 では、姿勢を操作せずに「視線の向き」の操作を用いて実験を行う

² 目有条件：上 $M = .351$ vs. 下 $M = .211$ / 目無条件：上 $M = .219$ vs. 下 $M = .288$

こととした。背もたれの向きを固定し、課題用の PC 画面位置を変更させることで「上を見る/下を見る」条件の操作を行った。また、比較の基準とするために統制条件として「正面を見る」条件を設定し、PC 画面を「上/下条件」それぞれでの位置の中心において課題を実施した。また、実験 2 ではすべての参加者に「目」を呈示することで、「見上げられる/見下ろされる/まっすぐ見つめられる」状態の操作も行った。もし、実験 1a の顕在自尊感情などで生じた効果が「姿勢」の影響によるものならば、実験 2 では一切の変化が生じないと予想される。一方、もし「視線の向き」や「目」の存在のみでも効果が生じるのならば、実験 2 でも実験 1a と同様の効果が観測されるだろうと推測できる。

なお、実験者の位置については、完全に参加者と離れてしまうと視線の効果が弱まる可能性があることや、姿勢の統制が崩れやすくなることを踏まえて、以降の実験ではすべて実験 1a と同様の形式で行うこととした。また、性差が生じている可能性があるため、効果の確認されている実験 1a において主な参加者であった女性を対象として、実験 2 を実施した。

実験 2

実験 1 で生じた効果が何によるものなのか、探索的に検討を行った。実験 2 では椅子の背もたれを固定することで、「姿勢」の操作ではなく「視線の向き」の操作を行う。また、実験 1 よりも詳細な比較検討を行うため、統制条件（正面を見る）を設けた。なお、今回の実験ではすべての参加者に対し「目」を呈示し、2 人の実験者が分担して実験を行った。

実験 2 の仮説は以下の通りとなる。1) もし「姿勢の向き」によって自尊感情の変化が発生するのならば、どの条件においても自尊感情の差は見られないだろう。2) もし「視線の向き」(or「目の位置」)によって自尊感情の変化が発生するのならば、上を見る条件(＝見下ろされる条件)は統制条件(正面を見る)に比べて、(特に顕在)自尊感情が低くなり、一方、下を見る条件(＝見上げられる or 見下ろす条件)は統制条件に比べて、(特に顕在)自尊感情が高くなるだろう、と推測される。

参加者

首都大学東京の女子学生 52 名が実験に参加した（平均年齢 18.400 歳 ($SD = 1.053$)）。また、全員が事前の質問紙に回答していた。実験 1 と同様、一般教養の『心の科学』の授業時間内にて、授業の評価に加点されることを条件に募集された。

条件

姿勢（視線の向き）

上条件、下条件に加えて、統制条件として正面条件をくわえた (Fig. 5)。また、姿勢ではなく視線の向きの操作の為、椅子の背もたれを常に垂直の状態に固定した。

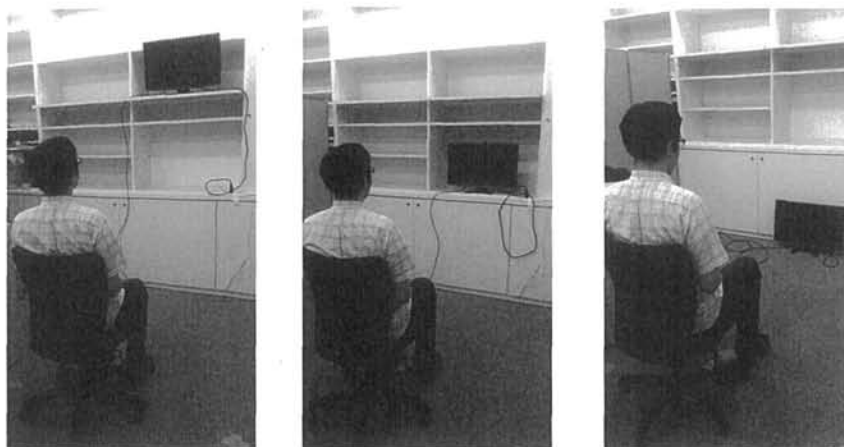


Fig. 5 : 姿勢（視線の向き）条件（左から：上、正面（統制）、下条件）

目

今回の実験では、全参加者において目有条件（実験 1 と同様）に統一して実施した。

手続き

手続きは基本的に実験 1a と同様に行った。

結果

操作チェック

実験者の違い、および課題の順番による影響を調べる為、それぞれ独立した 2 群の t 検定を行ったところ(実験者 1 vs. 実験者 2 / 潜在自尊感情課題先 vs. 顕在自尊感情課題先)、質問課題の結果が課題順によって有意に近い差が見られたものの ($t(50) = -1.859, p = .069$)、その他に有意な差は見られなかった ($p > .297$)。よって、質問課題の分析は課題順を考慮して行うものの、IAT については課題順を考慮せずに分析を行った。また、実験者の違いについては、どちらの課題も考慮せずに分析を行う事とした。

IAT

視線の向きを独立変数とした一元配置分散分析を行ったところ、有意な結果は見られなかった ($p = .578$)。また、個人差を考慮して、事前の Rosenberg 自尊感情尺度の得点を標準化して共変量とし、全ての交互作用を含む一般線形モデルによる分析も行ったところ、自尊感情得点の効果が有意傾向で見られたものの ($F(1, 46) = 2.937, p = .093, \eta^2 = .013$)、その他に有意な結果は見られなかった ($p > .691$)。

顕在自尊

課題順×視線の向きによる 2×3 分散分析を行ったところ、課題順の主効果において有意に近い効果が見られたものの ($F(1, 46) = 2.986, p = .091, \eta^2 = .007$)、その他に有意な効果は見られなかった ($p > .222$)。また、個人差を考慮して、事前の Rosenberg 自尊感情尺度の得点を標準化して共変量とし、全ての交互作用を含む一般線形モデルによる分析も行ったところ、自尊感情得点の効果が有意になったものの ($F(1, 40) = 21.168, p = .000, \eta^2 = .034$)、その他に有意な結果は見られなかった ($p > .333$)。

考察

視線の向きによる差は一切見られなかった。よって、実験 1 にて生じた自尊感情の変化は「視線の向き」の違いによるものではなく、「姿勢の向き」の違いによる変化、そして、「姿勢の向き」と「目」の組み合わせによる影響であると考えられる。

この結果を踏まえ、次の実験 3 では、実験 1b など潜在自尊感情が仮説と逆のパターンを示した原因についての検証を行う。実験 2 の結果や勢力姿勢に関する研究 (e.g., Welker et al., 2013) を踏まえると、自尊感情に対する姿勢の影響は「目」単独の影響に比して強いと推測される。よって、実験 1 における目有条件の効果を考える場合、比較的「目」の影響を考慮する「見上げられている/見下ろされている」という状態の比較だけの

議論では不十分となるだろう。それに加えて、姿勢の状態を中心に考え、それぞれ「高地位姿勢（＝上を向く姿勢）」と「低地位姿勢（＝下を向く姿勢）」を「見られている」ことそのものの影響も同時に考えなければならない。

勢力姿勢を「見られる」状態を考察すると、実験 1b で生じた効果を適切に説明できるかもしれないことが分かる。すなわち、当初想定した仮説とは逆の仮説が成り立つのである。「上を向く姿勢（＝高地位姿勢）」を「見られる」場合、まず姿勢の影響によって自尊感情が比較的高い状態となり、それによって周囲の「目」を受容的に捉えやすくなるために、より自尊感情が高くなるのではないか。一方、「下を向く姿勢（＝低地位姿勢）」を「見られる」場合は、姿勢の影響によって自尊感情が比較的低い状態となり、周囲の「目」を排除的に捉えやすくなるので、より自尊感情が低くなるのではないかと推測される。つまり、実験 1a では、上記のような「姿勢を見られる」効果と当初の仮説で想定した「見上げられる/見下ろされる」効果が同時に発生しているために、結果としてなんらの効果も生じなかったのではないだろうか。また、実験 1b で「姿勢を見られる」効果の仮説に沿った結果が出ているのは、実験者の位置によって「目」の効果が弱まった結果、「見上げられる/見下ろされる」効果が相対的に生じにくくなったためであると考えられるだろう。次の実験 3 では、「目」の呈示位置を固定して「見上げられる/見下ろされる」効果を排除することで、「姿勢を見られる」効果についての仮説を検証する。

なお、次の実験では実験 1a と 1b の結果を踏まえ、「姿勢を見られる」効果（仮説）と一致した効果の生じた男性参加者（実験 1b）を対象として、実験を実施する。

実験 3

姿勢に対する「目」の影響を検証する。Carney et al. (2010) で用いられた勢力姿勢と同様に、この実験における「上を向く」姿勢は身体を開く形となる高地位姿勢であり、「下を向く」姿勢は身体を縮める形となる低地位姿勢であると考えられる。そのため、それぞれの姿勢で自尊感情が高く/低く変化し、さらにそれぞれの姿勢を「見られる」ことで、姿勢の効果がより強くなるだろうと推測される。仮説は以下の通りとなる。男性において、1) 目が無い条件では、姿勢による影響は生じないか (実験 1a・1b のパターンより)、生じた場合は、上を向いた条件の方が下を向いた条件よりも自尊感情が高くなるだろう (実験 1a の顕在自尊感情より)。2) 目が有る条件では、勢力姿勢を見られる効果が強く生じ、上を向いた条件の方が下を向いた条件よりも、より自尊感情が高くなるだろう。また、実験 1a・1b の結果を踏まえると、3) その効果は潜在自尊感情において生じるだろう、と予想される。

参加者

首都大学東京の男子学生 45 名が実験に参加した (平均年齢 19.310 歳 ($SD = 0.973$))。また、そのうち事前の質問紙に回答していたのは 44 名であった。実験 1 および 2 と同様、一般教養の『心の科学』の授業時間内にて、授業の評価に加点される条件で募集された。

条件

姿勢

実験 1 と同様に、椅子の背もたれの向きと課題用 PC ディスプレイの位置で操作を行った (Fig.6)

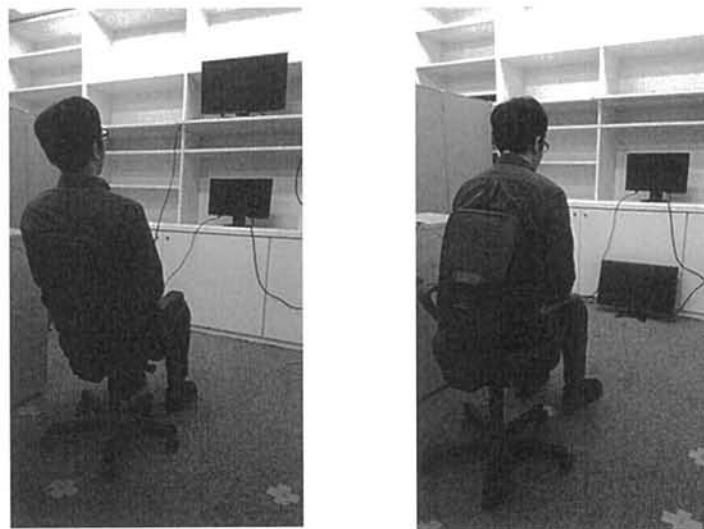


Fig. 6 : 姿勢条件 (右 : 上 (勢力) 条件、左 : 下 (非勢力) 条件)

※位置の変わっていない正面の画面が、目表示用画面

目

課題表示用ディスプレイとは別に、目表示用ディスプレイを参加者の正面に設置した。このディスプレイに、半数の参加者は目有条件用の図形を、半数の参加者には目無条件用の図形を、それぞれ表示した (Fig. 7)。15 秒で表示、15 秒で消失のワンセットを、表示も消失もパターンの違う 3 組×3 種類準備し、それをランダムで表示し続けた。目表示用ディスプレイの制御は Microsoft PowerPoint を用いて行った。

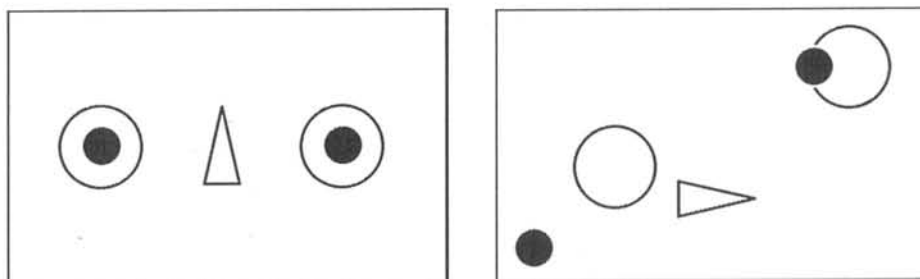


Fig. 7 : 条件ごとの目表示用画面 (左 : 目有条件、右 : 目無 (統制) 条件)

結果

分析準備

実験 1 と同様の手順で、IAT と質問課題をそれぞれ得点化した。

課題の順番による影響を調べる為、独立した 2 群の t 検定を行ったところ (潜在自尊感情課題先 vs. 顕在自尊感情課題先)、有意な差は見られなかった ($p > .285$)。よって、課題の順番による違いは考慮せずに分析を行う事とした。

IAT

姿勢条件×目条件の分散分析を行ったものの、有意な効果は見られなかった ($p > .692$)。

個人差を考慮した分析を行う為、事前の Rosenberg 自尊感情得点を標準化して共変量とし、全ての交互作用を含む一般線形モデルによる分析を行ったところ、目条件×姿勢条件×事前の自尊感情得点の交互作用が有意に近い効果となった ($F(1, 36) = 3.874, p = .057, \eta^2 = .019$)。事前の自尊感情得点の高い群と低い群に分けて (+1SD と -1SD) 分析を行ったところ (Fig 8)、+1SD の参加者においては、下条件において目無条件 ($M = .379$) の方が目有条件 ($M = .090$) よりも数値が大きい傾向となり ($p = .052$)、目有条件において上条件 ($M = .261$) の方が下条件よりも数値が大きい、という結果になっていた ($p = .041$)。一方、-1SD の参加者においては、下条件にて目有条件 ($M = .332$) の方が目無条件 ($M = .148$) よりも数値が大きい傾向となっていた ($p = .061$)。

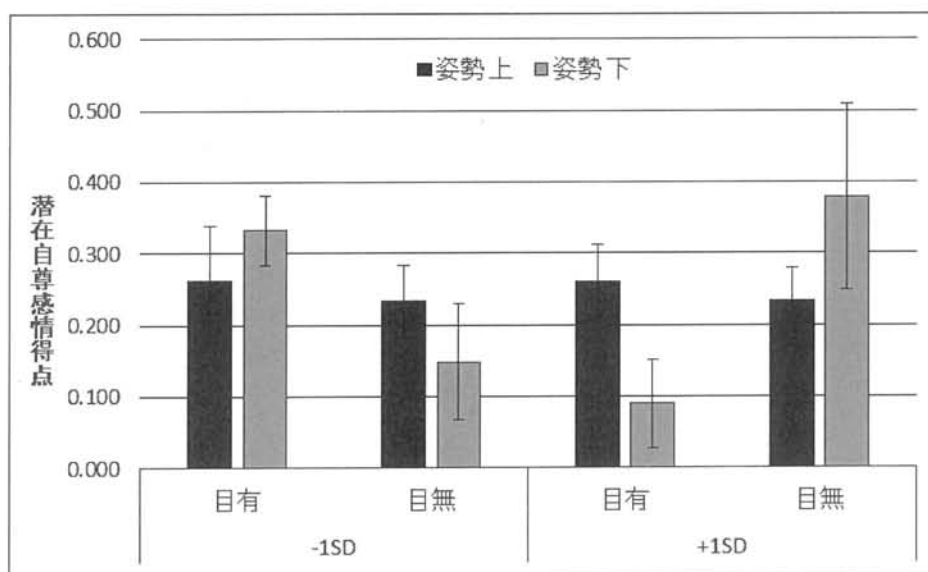


Fig 8 : IAT における共変量を含む姿勢×目の有無条件による分析結果 (推定値)

顕在自尊

姿勢条件×目条件の分散分析を行ったものの、有意な効果は見られなかった ($p > .353$)。

個人差を考慮した分析を行う為、事前の Rosenberg 自尊感情得点を標準化して共変量とし、全ての交互作用を含む一般線形モデルによる分析を行ったところ、事前の自尊感情得点の効果が有意になったものの ($F(1, 36) = 45.054, p = .000, \eta^2 = .068$)、その他に有意な効果は見られなかった ($p > .514$)。

考察

概ね仮説通りの結果が得られた。個人差としての自尊感情が高い参加者においては、仮説通り目が有る条件において、上を向く姿勢よりも下を向く姿勢の方が潜在自尊感情の低い結果となった。さらに、下を向く姿勢については、目が無い条件よりも目が有る条件の方が、有意傾向ではあるものの潜在自尊感情の低くなる結果となっており、この結果についても仮説通りといえる。一方、目が無い条件においては、数値としては差が生じているように見えるものの、こちらも仮説通り姿勢の違いによる有意な差は見られなかった。また、個人差としての自尊感情が低い参加者に関しては、下を向く姿勢の条件において、目が無い場合に比べて目が有る場合の方が潜在自尊感情の高い傾向となっていた。自尊感情の個人差によって、下を向く姿勢の効果か、もしくは姿勢と目の組み合わせの効果が違うということが推測される。

自尊感情が低い参加者の下条件における、目が有る条件と目が無い条件の差はどうして生じたのだろうか。現段階では、以下のような推測が可能である。自尊感情が高いということは自分自身の評価が安定している状態を表しており、このような状態では外的な評価やその手がかりに頼る必要が少ないとも言える。ゆえに、下を向く姿勢 (= 低勢力姿勢)

を見られるという、自分自身の評価とはかけ離れた状態でのみ、周囲の環境等の影響が生じると考えられる。Welker et al. (2013) では、高地位姿勢を取った時により排除の影響を受けやすいという結果が示されているが、本研究のこの結果は、「元々自信のある人（自尊感情の個人差が高い人）」と言い換えることで、同様の結果を示していると言えないだろうか。すなわち、自信がある状態だからこそ、「低地位姿勢を見られている状態」が強力な脅威として作用するのではないか、という捉え方である。

一方、自尊感情が低い状態は自己の評価が低く、周囲の影響を受けやすいとも言える。自分を見つめる視線は自分への肯定的評価を意味するとも解釈できるため (c.f., Wirth, Sacco, Hugenberg, & Williams, 2010)、単純に「見られる」ことによって自尊感情が高くなるとも推測できるだろう。このような影響によって、自尊感情が低い参加者における潜在自尊感情の結果は生じた可能性が考えられる。

顕在自尊感情については効果が一切生じなかった。実験 1b とは一致する結果であったが、一方で目無条件については同じ状況であるはずの実験 1a における結果とは一致しなかった。実験 1 の考察でも述べたが、実験 3 の結果とあわせると、顕在自尊感情においては性差が存在する可能性がより高くなったと言えるだろう。潜在自尊感情については、女性の比較可能なデータが実験 1a しかないため不明瞭ではあるものの、その実験 1a における IAT の結果パターン（個人差を含んだ分析）は実験 1b や実験 3（自尊感情高群）と一致しているため³、男女差は存在しない可能性も考えられる。この点については、将来の研究による更なる検討が必要となるだろう。

³ 目有条件：上 $M = .176$ vs. 下 $M = .095$ / 目無条件：上 $M = .221$ vs. 下 $M = .244$

総合考察

4つの実験を通して、姿勢の上下と目の有無による自尊感情への影響が検討された。

実験 1a は、部分的ではあるものの仮説どおりの結果となった。顕在自尊感情では、目が有る場合において、上を向く姿勢（見下ろされている状態）よりも下を向く姿勢（見上げられている状態）の方が、自尊感情の高いという結果になっていた。また、事前に特別な仮説を設けていなかった性別での違いが見られ、女性では、特に目が有る場合において、仮説通りのパターンが見られたものの、男性では特に差が見られないという結果となった。ただし、個人差を含んだ分析を行なうと性別の効果が弱まり、仮説で想定された交互作用が残存するため、この性差は男性の人数が少なかったことによる影響である可能性も考えられる。一方、潜在自尊感情は仮説通りの効果が見られず、顕在自尊感情と潜在自尊感情では異なる結果が表れる可能性が示唆されている。

実験 1b では、実験者の「目」の影響を排除するために、実験 1a とは実験者の待機位置を変え、男性参加者を対象に実験を実施した。結果、顕在自尊感情では「目」の効果以外が見られなかったため、実験 1a での結果は性差がある可能性が高まったと考えられる。また、潜在自尊感情においては、目有条件について、上を向く姿勢（見下ろされている状態）の方が下を向く姿勢（見上げられている状態）よりも自尊感情が高いという、仮説とは逆の結果となっていた。これらの結果は、有意ではないものの実験 1a の男性参加者のパターンと一致するため、一貫した結果であると考えられる。ゆえに、実験 1a・1b の結果から、潜在自尊感情と顕在自尊感情、男性と女性では、姿勢と「目」の組み合わせの影響が異なるのではないかと推測できるだろう。なお、顕在自尊感情における「目」の効果についても、実験 1b の結果と実験 1a の男性参加者のデータは一致したパターンであることから、実験者の位置は自尊感情の変化パターンを変えるのではなく、単に「目」の効果を弱める結果しかもたらさないと推測される。実験に使用した「目」を模した図形がいまいなものであることから、実験者の存在を感じる（直接見えなくとも）ことで、図形がより強く「目」として作用しやすい、などの理由が考えられる。

実験 2 以降では、実験 1 の潜在自尊感情において、仮説と逆のパターンが示された理由を特に検証することとした。そのために、まず実験 1 で生じた効果が、「姿勢の向き」の違いによるものなのか「視線の向き」の違いによるものなのか、その峻別のための実験を行なった。姿勢の操作は行わず、視線の向き（+見上げられている/見下ろされている状態）の操作を行ない、女性参加者を対象に実験を行なったところ、潜在・顕在どちらの自尊感情においても一切の効果が見られなかった。よって、実験 1 で生じた効果は、姿勢の向きの影響、および姿勢の向きと「目」の組み合わせによる効果であると考えられる。

実験 3 では、姿勢の向きとその姿勢を「見られる」ことそのものの組み合わせによる影響を検討した。実験 2 の結果により、実験 1 で生じた効果は姿勢の向きがまず重要な要因であることが分かる。これを踏まえて実験 1 の結果を考えると、上向きの姿勢（高地位姿

勢)と下向きの姿勢(低地位姿勢)をそれぞれ「見られる」ことで、より姿勢の効果が強くなるという可能性も考えられるだろう。実験1では「目」の位置も操作されているため、この「見られる」影響と「見上げられている/見下ろされている状態」の影響を分けて解釈することができない。よって、実験3では「目」の位置を固定することで、姿勢を「見られる」ことの影響を検証することとした。結果、自尊感情の個人差を含めた分析において、元々自尊感情の高い参加者は目が有る場合、上を向く姿勢よりも下を向く姿勢の方が潜在自尊感情の低くなる結果が示されていた。また、下を向く姿勢では、目が有る場合の方が目の無い場合よりも、潜在自尊感情が低くなる傾向があるという結果も示されており、仮説通りの結果と言える。一方、元々自尊感情の低い参加者については、下を向く姿勢の場合、目が有る時よりも目が無い時の方が自尊感情の低くなる傾向が示されており、仮説通りとは言えない結果となっていた。この点に関しては、今後の研究によるさらなる検証が必要となるだろう。

これらの結果を踏まえて、このセクションでは、本研究で示された疑問点や限界、先行研究やその他の領域との関連、および今後の検討を必要とする部分についての議論を行う。

本研究で示された議論点と限界

潜在自尊感情と顕在自尊感情

4つの実験を通して、潜在自尊感情と顕在自尊感情では姿勢および「目」の影響が異なるという可能性が示唆された。では、この違いは何に由来する現象なのだろうか。考えられる可能性としては、以下の4つが挙げられるだろう。すなわち、1)測定方法上の問題、2)構成概念上の問題、3)潜在自尊感情と顕在自尊感情の関連性による問題、4)潜在自尊感情と顕在自尊感情への影響が元来異なる可能性、である。

まず、測定方法上の問題としては、質問課題にいくつかの問題が考えられる。質問課題で使用した尺度は、本来1~4、5、7等の数字でグラデーションをつけて回答するものである。先行研究(e.g., Carney et al., 2010)もこのような方法を用いていた。しかし、今回の研究では、回答中も手元を見ずに画面を見続けられるよう、回答方法を簡略化して2件法(当てはまる/当てはまらない)として実施した。代わりに項目数を増やして対応したものの、項目内容も類似の概念を測定するために重複を感じる内容が多く、適切に顕在自尊感情を測定できなかった可能性も考えられるだろう。ただし、実験1aでは仮説通りの効果が出ているため、この可能性に対する反論も可能であると言える。

また、潜在自尊感情測定のために使用したIATについても、本研究ではブロックの順番を全参加者で統一した。本来は「自己・ポジティブ判断」と「他者・ポジティブ判断」のブロック順について、学習等の影響を排除するために参加者間でカウンターバランスを取るのが一般的な手順である。ただし、実験1や実験3では、全員同じ手順であっても差が生じているため、この点を大きな問題として扱わなくても良いと言うことは可能だろう。

構成概念上の問題としても、質問課題に用いた尺度がポイントとなる。本研究では3つ

の別々の尺度 (Rosenberg の自尊感情尺度、Janis & Field の尺度、特性的自己効力感尺度) を「顕在自尊感情」測定のために用いている。よって、それぞれの尺度が測定しようとしている構成概念について、姿勢と「目」が別々の影響を与えている可能性が考えられるだろう。ただし、実験ごとに 3 つの尺度の相関係数を算出すると、全ての r は .335 よりも大きく最大 .721 という中～強程度の相関がみられ、全ての相関係数が 5% 水準で有意になっている。このことから、上記の疑問は否定され、概して共通する構成概念を測定していると考えても良いだろう。もっとも、潜在自尊感情については妥当性を高めるために、別の潜在指標 (e.g., ネームレター効果; Kitayama & Karasawa, 1997; Nuttin, 1985, 1987) を用いて同様の実験を行い、同じ結果を示す手順が必要となるだろう。

最も重要な議論点と言えるのが、潜在自尊感情と顕在自尊感情の関連性である。本研究では「一般的な関連性がある (e.g., Hofmann, Gawronski, Gschwendner, Le, & Schmitt, 2005)」、すなわち、概ね同じものとして扱える前提で実験を行なった。しかし、「潜在自尊感情」として測定しているものは、自尊感情ではなく「一般化された潜在的な感情 (affect)」として扱った方が良いと主張している研究も存在しており (Buhrmester, Blanton, & Swann, 2011)、果たして同じ「自尊感情」として扱って良いのかには多くの議論が存在する。本研究でも「顕在自尊感情」と「潜在自尊感情」は異なるパターンを示しているが、これが「潜在」と「顕在」という「同じ自尊感情の異なる側面」に由来するのか、それとも「潜在自尊感情」として扱っているものが「自尊感情以外である」ために生じている効果なのか、本研究だけでは見極めることが難しいだろう。今後の研究では、この点についての詳細なレビューを踏まえて、新しい仮説を基にした実験が必要になると考えられる。

また、仮に今回測定した「潜在自尊感情」と「顕在自尊感情」が同じ「自尊感情」であっても、潜在と顕在ではそもそも身体性の影響が異なる可能性も当然に考えられる。Huang, Galinsky, Gruenfeld, & Guillory. (2011) では、姿勢と割り当てられた役割 (上司役/部下役) が、それぞれ顕在測度と潜在測度にどのような影響を与えるか、検証を行っている。「偉そうな姿勢」と「縮こまった姿勢」のどちらかを取り、更にパズル課題において「指示をする上司役」と「指示の通り課題を行う部下役」に分かれて課題に取り組むという操作を用い、主観的な勢力感の質問 (顕在指標) と勢力関連語を用いた単語完成課題 (潜在指標) を従属変数として実験を行っている。結果、顕在指標では姿勢・役割両方の影響が見られている一方で、潜在指標では姿勢の影響のみが見られる、というパターンが現れていた。また、この研究では複数の実験を実施し、姿勢の影響が最も強いというデータを示している。さらに、潜在自尊感情と顕在自尊感情はそもそも、元々の回答傾向によって報告される結果が異なりやすい、という研究結果も存在しており (Olson, Fazio, Hermann, 2007)、本研究においても、潜在自尊感情と顕在自尊感情が異なる結果となるのは、決して不自然なことでは無いとも言えるだろう。

潜在自尊感情と顕在自尊感情が異なるパターンとなる要因については、様々なものが検討されている。その 1 つとして挙げられているのが、次の節で議論する性差である。

男性と女性（ジェンダー差）

男性と女性では、潜在自尊感情と顕在自尊感情の回答パターンが異なるという研究が存在する（Pelham, Koole, Hardin, Hetts, Seah, & DeHart, 2005）。女性は男性と比して自身の感情や直感を信じるように社会化されているため、潜在と顕在の自尊感情がより一致しやすいと主張しており、実証的データによってそのような結果が示されている。

また、身体性の影響についても、性差が存在する場合がある。Schubert & Koole. (2009) では、拳を握る動作についての性差を検討している。拳を握る動作は、男性においては戦闘的な威嚇を示す体勢であるのに対し、女性では防衛的な身体動作を表していると考えられる。この仮説に一致する通り、顕在的社会的自尊感情の高低や自己と勢力関連特性との潜在連合において、男性では拳を握ると自尊感情/特性との関連が高くなるが、女性では同じ動作を行っても逆に低くなる、という結果を示している。また、Roberts & Arefi-Afshar. (2007) では、数学の課題のパフォーマンスに対する主観的誇り（proud）の程度を対象として検証を行っており、姿勢の影響でパターンが変化すると同時に、そのパターンが男女によって異なることも示している。このように、同じ身体状態であっても、男女差によって異なる影響をもたらす可能性があるのである。

本研究で用いられた姿勢についても同様のことが考えられる。たとえば、特に下を向く姿勢については、男女で姿勢の取りづらさや社会的、性役割的に期待されやすい姿勢かどうかには差があると考えられるため、性別によって自尊感情が異なるパターンで変動したと推測することも可能だろう。さらに、本研究で行われた4つの実験は、すべて実験者が男性であったため、その影響も考慮しなければならない。実験1の考察で述べたとおり、参加者に呈示した「目」が「実験者」として解釈された可能性もある以上、実験者の性別もまた効果を左右する要因となり得る。今後の研究では、女性の実験者による実験の実施も必要となるだろう。

その他に関連する可能性のある要因

本研究で用いた身体性操作によって影響を受けると考えられるのは、おそらく自尊感情だけではない。たとえば、勢力と直接的に関連性が高いと言える「社会的支配志向（Social Dominance Orientation: Pratto, Sidanius, Stallworth, Malle, 1994）」も検証する必要があるだろう。また、人から「見られる」とことと関わりの深い「自己意識特性（self-consciousness: Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975）」との関連性も検討すべきだろう。特に、本研究で用いた「目」を模した図形が、正しく「目」として機能していたのかどうかを確認するために、必要不可欠な手順であると言える。

更に、自己概念的な領域だけではなく、情報処理方略についても検証が必要だと考えられる。Matsuzaki et al., (2013) では、目標を理想と捉えやすいか、あるいは義務と捉えやすいかの個人差である「制御焦点（regulatory focus: Higgins, 1997, 1998）」を通じて、「上を向く」姿勢と「下を向く」姿勢では課題処理の方略が変化することが示されている。「上

を向く」姿勢では「下を向く」姿勢に比べて、詳細な情報を排除し全体の意味や統合を優先して処理する「全体的 (global) 処理」が、より促進されているという結果が示されていた。また、目標を義務的に捉えやすい「予防焦点 (prevention focus)」の個人差が高い参加者では「下を向く」姿勢の方が、予防焦点の個人差が低い参加者では「上を向く」姿勢の方が、それぞれ全体的な反応時間が速いというデータも示されている。後者の結果は、姿勢がそれぞれ全体的/部分的 (local: 全体の意味や統合より詳細な情報を優先する方略) な処理と結びついているとすると、2つの制御焦点と適切な処理方略が結びつくという「制御適合理論 (regulatory fit theory: Higgins, 2008)」に一致する結果である。

さらに、Slepian, Masicampo, & Ambady. (2015) では、垂直性メタファーと情報処理方略の関連を検証している。相対的に下の位置にいることを知覚すると、定義的で本質的な意味や特質よりも詳細で文脈的な情報を好む「具体的 (concrete) 処理」が促進され、一方、相対的に上の位置にいることを知覚すると、詳細で文脈的な情報よりも本質的で定義的な意味や統合を好む「抽象的 (abstract) 処理」が、それぞれ促進されることが示されている。この研究と対応する結果を示した研究が勢力の領域でも存在しており、勢力が高い程高次の解釈 (= 抽象的な処理や思考) を用いることが分かっている (Smith & Trope, 2006)。

そして、これらの抽象/具体的処理は、身体性との関連が指摘されている。Maglio & Trope. (2012) では、抽象的処理が活性化していると身体性の影響が制限され、具体的処理の時のみ身体性の影響が生じるという実験結果が示されている。ただ、抽象的処理が活性化している時の方がメタファーの利用が高まるという結果 (Jia & Smith, 2013) も存在しているため、処理方略と身体性の関係性は簡潔にまとめられるものでも無いだろう。抽象/具体的処理は「解釈レベル理論 (Construal Level Theory, CLT: Trope & Liberman, 2010)」を通じて、主観的な距離である「心理的距離 (psychological distance)」とも関連がある。「下を向く」姿勢は「足元を見る」姿勢とも、「上を向く」姿勢は「遠くを見る」姿勢であるとも解釈できるので、この方向からも今回用いた姿勢と関わっている可能性があると言える。

今回の研究の数値を見ると、特に実験1の顕在自尊感情 (女性) や実験3の潜在自尊感情の結果において、上条件の数値がほぼ一定なのに対し、下条件の数値が目条件によって変化することで交互作用が生じているとも捉えられる。このような数値の変動に、処理方略が関わっている可能性が考えられるだろう。上条件と下条件では「姿勢の取りにくさ」が違うという操作的な要因ももちろん考えられるが⁴、将来の研究で検討する必要性は高いと言える。

⁴ 下条件参加者の方が「姿勢が辛い」という感想を述べる傾向があった。実際、背もたれが直角よりも内側に倒されているため、背もたれが後ろに倒されている上条件に比べて、日常的に取る姿勢とは大きく離れているとも言える。

将来の研究について

今後の研究で検討すべき問題としては、以下の点が挙げられる。まず、1) 性差を考慮するための、女性実験者による実験の実施である。また、実験3では「目」の位置を固定して実験を行ったが、2) 課題を行うディスプレイを固定し、椅子の背もたれによる姿勢の操作を行いつつ、「目」の位置も上下それぞれに呈示する、といった実験も必要だろう。すなわち、勢力姿勢を「見下ろされる/見上げられる」ことによる影響の検証である。また、3) より「目」に近い呈示刺激を用いた検証、も必要であろう。本研究では、先述した図形を「目」として呈示したものの、正しく「目」として機能していたかどうかは、本研究の4つの実験だけでは不明瞭である。より「目」に近づけた絵や、実際の「目」の写真など、幅広い素材を用いた検証が必要となるだろう。操作については、4) 姿勢のより厳密な統制を行った実験、も実施しなくてはならない。Carney et al. (2010) の勢力姿勢では「広げられて、開いた姿勢 (expansive and openness)」が高地位姿勢とされているが、これにより近づけたものなどが考えられる。また、上記で議論した様々な変数に関する検証も必要だろう。実験3の結果が女性参加者でも当てはまるのか、この検討も不可欠である。

身体性の研究に限った話ではないが、近年では自動性研究などの分野において、実験の再現性の問題が議論となっている。しかし、本研究の結果から、同じ姿勢であっても周囲の状況や個人内要因によって結果が変化する可能性がある、ということが、改めて示唆されたと言えよう (cf. Cesario & McDonald, 2013)。すなわち、一見同様の操作を行っているように見えても、実験者が見落としている何らかの状況変化や個人差によって、結果が大きく変わってしまうかもしれないのである。Huang et al. (2011) では姿勢が最も強い影響を持つと述べられているものの、本研究の結果から考えると、姿勢は様々な要因の1つであると解釈する方が適切なのではないかとも言えそう。つまり、姿勢とその他の調整要因と複雑に絡み合って、ようやく知覚・認知・判断・行動への影響が生じていく、という立場である。どちらにしても、より厳密な操作、より厳密な統制による実験が、今後は必要となることには変わりないだろう。本研究より得られた知見が、自動性や身体性研究の発展に寄与することを祈っている。

謝辞

本論文の執筆にあたって、多くの方々の支援を賜ることができました。

沼崎先生からは、仮説の設定から実験の実施、考察の組み立て等、様々な局面において大変多くのアドバイスをいただきました。特に、私が未熟な部分である知識面や技術面において、本研究を最後まで実施するのに必要不可欠であった数々の要素を提供してくださったと思っております。本当にお世話になりました。1年長引いてしまいご迷惑もおかけしました。ありがとうございました。

松崎さんには、考察に関する議論や関連する論文の提供など、先生とはまた異なる面でお世話になりました。長々と私の議論におつきあいくださりありがとうございました。時間を使ってしまい申し訳ありません。また、学生からの視点としての修論に関する情報もくださり、特に精神面での支えとなりました。併せて感謝の気持ちを申し上げます。ありがとうございました。

最初の実験を実習で作り上げた、同期の平間くんと一ノ瀬さんにも、この場をお借りして感謝の気持ちを申し上げます。最初のアイデアそのものや、それを知識的に実験の形で持っていくことについては、2人の存在があつてこそ、でした。2人のアイデアをお借りする形で始まった実験が、ひとまず何とか実を結びました。ありがとうございました。

沼崎ゼミやプライミング研究会に出席されているみなさんにも、感謝の言葉を申し上げたいと思います。私の未熟な実験計画を、知識面や実験実施の面から分析・解釈に至るまで、様々な角度で検討してくださいました。あの場で頂いた数々の助言があつて、ここまでたどり着けたのだと思っております。ありがとうございました。

最後になりましたが、実験に参加して下さったすべてのみなさまのおかげで、本研究が成立しております。ディブリーフィングでの数々のご意見は、研究の方向性を考えるうえでとても重要かつ貴重なものでした。本当にありがとうございました。

この研究に関わったみなさまに、改めて、心より感謝致します。1年長引いてしまつて、ご迷惑もたくさんおかけしたと思います。申し訳ありませんでした、そして、ありがとうございました。

引用文献

- Baumeister, R. F. (1982). A Self-Presentational View of Social Phenomena. *Psychological Bulletin*, **91**, 3-26
- Bohns, V. K. & Wiltermuth, S. S. (2012). It hurts when I do this (or you do that): Posture and pain tolerance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **48**, 341-345.
- Buhrmester, M. D., Blanton, H., & Swann, Jr., W. B. (2011). Implicit Self-Esteem: Nature, Measurement, and a New Way Forward. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 265-385.
- Carney, D. R., Cuddy, A. J. C., & Yap, A. J. (2010). Power Posing: Brief Nonverbal Displays Affect Neuroendocrine Levels and Risk Tolerance. *Psychological Science*, **21**, 1363-1368.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 (1974). Self-Esteem の研究 九州大学教育学部紀要, **18**, 53-65.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Giessner & Schubert (2007). High in the hierarchy: How vertical location and judgments of leader's power are interrelates. *Organizational Behavior and Human Decision Process*, **104**, 30-44
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Haley, K. J. & Fessler, D. M. T. (2005). Nobody's watching? Subtle cues affect generosity in an anonymous economic game. *Evolution and Human Behavior*, **26**, 245-256.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, **38**, 291-298.
- Higgins, E. T. (2008). Chapter 23 Regulatory Fit. In J. Y. Shah, W. L Gardner (Eds.), *Handbook of Motivation Science* (pp.356-372). New York: Guilford Press.
- Hofmann, W., Gawronski, B., Gschwendner, T., Le, H., & Schmitt, M. (2005). A Meta-Analysis on the Correlation Between the Implicit Association Test and Explicit Self-Report Measures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1369-1385.

- Huang, L., Galinsky, A. D., Gruenfeld, D. H., & Guillory, L. E. (2011). Powerful Postures Versus Powerful Roles: Which Is the Proximate Correlate of Thought and Behavior? *Psychological Science*, 22, 95-102.
- 石井国雄・沼崎誠 (2011). 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響 社会心理学研究, 27, 24-30.
- Janis, I. L. & Field, P. B. (1959). Sex differences and personality factors related to persuasibility. In Hovland, C. I., Janis, I. L. (Eds.), *Personality and Persuasibility* (pp.55-68). New Haven: Yale Univ. Press.
- Jia, L. & Smith, E. R. (2013). Distance makes the metaphor grow stronger: A psychological distance model of metaphor use. *Journal of Experimental Social Psychology*, 49, 492-497.
- Jones, M. E., Nettle, D., & Bateson, M. (2011). Effects of eye images on everyday cooperative behavior: a field experiment. *Evolution and Human Behavior*, 32, 172-178.
- Kitayama, S., & Karasawa, M. (1997). Implicit self-esteem in Japan: Name letters and birthday numbers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 736-742.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Landau, M. J., Meier, B. P., & Keefer, L. A. (2010). A metaphor-enriched social cognition. *Psychological Bulletin*, 136, 1045-1067.
- Leary, M. R. (1999a). Making sense of self-esteem. *Current Directions in Psychological Science*, 8, 32-35.
- Leary, M. R. (1999b). The social and psychological importance of self-esteem. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology* (pp. 197-221). Washington, DC: American Psychological Association.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 32, pp. 1-62). San Diego, CA: Academic Press.
- Leary, M. R., & Downs, D. L. (1995). Interpersonal functions of the self-esteem motive: The self-esteem system as a sociometer. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp. 123-144). New York, NY: Plenum.
- Leary, M. R. & Kowalski, R. M. (1990). Impression Management: A Literature Review and Two-Component Model. *Psychological Bulletin*, 107, 34-47

- Matsuzaki, K., Numazaki, M., Hirama, K., Ichinose, N., & Ochiai, H. (2013). Can body posture influence global versus local processing styles? Presented poster at The 14th annual Society of Personality and Social Psychology conference, New Orleans, USA.
- Maglio, S. J., & Trope, Y. (2012). Disembodiment: Abstract construal attenuates the influence of contextual bodily state in judgment. *Journal of Experimental Psychology: General*, *141*, 211–216.
- Meier, B. P., Hauser, D. J., Robinson, M. D., Friesen, C. K., & Schjeldahl, K. (2007). What's "up" with God? Vertical space as a representation of the divine. *Journal of Personality and Social Psychology*, *93*, 699–710.
- Meier, B. P. & Robinson, M. D. (2004). Why the sunny side is up. *Psychological Science*, *15*, 243–247.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—教育心理学研究, *43*, 306–314.
- Nuttin, J. M. (1985). Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, *15*, 353–361.
- Nuttin, J. M. (1987). Affective consequences of mere ownership: The name letter effect in twelve European languages. *European Journal of Social Psychology*, *17*, 381–402.
- Oda, R., Niwa, Y., Honma, A., & Hiraishi, K. (2011). An eye-like painting enhances the expectation of a good reputation. *Evolution and Human Behavior*, *32*, 166–171.
- Olson, M. A., Fazio, R. H., & Hermann, A. D. (2007). Reporting Tendencies Underlie Discrepancies Between Implicit and Explicit Measures of Self-Esteem. *Psychological Science*, *18*, 287–291.
- Pelham, B. W., Koole, S. L., Hardin, C. D., Hetts, J. J., Seah, E., & DeHart, T. (2005). Gender moderates the relation between implicit and explicit self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, *41*, 84–89.
- Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. (1994). Social Dominance Orientation: A Personality Variable Predicting Social and Political Attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, *67*, 741–763.
- Roberts, T.A. & Arefi-Afshar, Y. (2007). Not all who stand tall are proud: Gender differences in the proprioceptive effects of upright posture. *Cognition and Emotion*, *21*, 714–727.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Schubert, T. W. (2005). Your highness: Vertical positions as perceptual symbols of power. *Journal of Personality and Social Psychology*, *89*, 1–21.
- Schubert, T. W. & Koole, S. L. (2009). The embodied self: Making a fist enhances men's power-related self-conceptions. *Journal of Experimental Social Psychology*, *45*,

828-834.

- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Printice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663-671.
- Slepian, M. L., Masicampo, E. J., & Ambady, N. (2015). Cognition From on High and Down Low: Verticality and Construal Level. *Journal of Personality and Social Psychology*, 108, 1-17.
- Smith, P. K., & Trope, Y. (2006). You focus on the forest when you're in charge of the trees: Power priming and abstract information processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 578-596.
- Stepper, S. & Strack, F. (1993). Proprioceptive Determinants of Emotional and Nonemotional Feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 211-220.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2010). Construal-level theory of psychological distance. *Psychological Review*, 117, 440-463.
- Welker, K. M., Oberleitner, D. E., Cain, S., & Carré, J. M. (2013). Upright and left out: Posture moderates the effects of social exclusion on mood and threats to basic needs. *European Journal of Social Psychology*, 43, 355-361.
- Wells, G. & Petty, R. (1980). The effects of overt head movement on persuasion. *Basic and Applied Social Psychology*, 1, 219-230.
- Wirth, J. H., Sacco, D. F., Hugenberg, K., & Williams, K. D. (2010). Eye Gaze as Relational Evaluation: Averted Eye Gaze Leads to Feelings of Ostracism and Relational Devaluation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 36, 869-882.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

Appendix

○顕在自尊感情測定に使用した3つの尺度

1 自尊感情尺度 10 項目 (Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982)

1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。
 2. 色々な良い素質をもっている。
 3. 敗北者だと思えることがよくある。※
 4. 物事を人並みには、うまくやれる。
 5. 自分には、自慢できるところがあまりない。※
 6. 自分に対して肯定的である。
 7. だいたいにおいて、自分に満足している。
 8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。※
 9. 自分は全くだめな人間だと思えることがある。※
 10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。※
- (※印がついた項目は逆転項目)

2 特性的自己効力感尺度 23 項目 (Sherer et al., 1982; 成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)

1. 自分が立てた計画はうまくできる自信がある。
2. しなければならないことがあっても、なかなかとりかからない。※
3. 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける。
4. 新しい友達を作るのが苦手だ。※
5. 重要な目標を決めても、めったに成功しない。※
6. 何かを終える前にあきらめてしまう。※
7. 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人の所へ行く。
8. 困難に出会うのを避ける。※
9. 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない。※
10. 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう。※
11. 面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる。
12. 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる。
13. 新しいことを始めようと決めても、出だしでつまづくとすぐにあきらめてしまう。
※
14. 最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろうとする。
15. 思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない。※
16. 難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない。※

17. 失敗すると一生懸命やろうと思う。
 18. 人の集まりの中では、うまく振る舞えない。※
 19. 何かをしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる。※
 20. 人に頼らない方だ。
 21. 私は自分から友達を作るのがうまい。
 22. すぐにあきらめてしまう。※
 23. 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない。※
- (※印のついた項目は逆転項目)

3 Janis & Field の尺度 23 項目 (Janis & Field, 1959; 遠藤・安藤・冷川・井上, 1974)

1. あなたが知っている大部分の人々に比べて自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか。
2. あなたは、自分が価値のある人間であると感じていますか。
3. あなたは、自分の知っている人々が、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくると確信していますか。
4. あなたは、自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じる事が、どのくらいありますか。
5. あなたは、自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。
6. あなたは、自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。
7. 一般に、あなたは自分のいろいろの能力についてどのくらい自信をもっていますか。
8. あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがどのくらいありますか。
9. あなたは、自分が他の人々とどのくらいうまくやってゆけるかということについて気にしますか。
10. あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか。
11. あなたは、他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分一人ではいっていくような場合、気兼ねや不安をおぼえますか。
12. あなたは、人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。
13. あなたは、クラスや自分の同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったりしますか。
14. 他の人々がみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合、あなたはふつうどのくらいとり乱したり、まごついたり（あ

がったり) しますか。

15. 他の人々から、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（または劣等生）とみられているかということについて、あなたは気になりますか。
16. 人といっしょにいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいいかについて、困りますか。
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき、あなたはどの位長くそのことを気にしますか。
18. あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしいですか。
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。
20. あなたは、恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか。
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。
22. あなたの友達や知りあいのなかにあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき、あなたはそのことをどのくらい気にしますか。
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたはどのくらい気になりますか。

4 Janis & Field の尺度 23 項目（上記 3 を参考に、2 件法で解答可能な形式に文章を改定）

1. あなたが知っている大部分の人々に比べて自分の方が劣っていると感じるようなことがある。※
2. あなたは、自分が価値のある人間であると感じている。
3. あなたは、自分の知っている人々が、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくると確信している。
4. あなたは、自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じることはよくある。※
5. あなたは、自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがある。※
6. あなたは、自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がある。※
7. 一般に、あなたは自分のいろいろの能力についてある程度自信をもっている。
8. あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがよくある。※
9. あなたは、自分が他の人々とどのくらいうまくやってゆけるかということについて気にする。※

10. あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評を割りと気にする。※
11. あなたは、他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分一人ではいっていくような場合、気兼ねや不安をおぼえる。※
12. あなたは、人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがある。※
13. あなたは、クラスや自分の同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったりする。※
14. 他の人々がみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合、あなたはよくとり乱したり、まごついたり（あがったり）する。※
15. 他の人々から、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（または劣等生）とみられているかということについて、あなたは気になる。※
16. 人といっしょにいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいいかについて、困る。※
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき、あなたは割りと長くそのことを気にする。※
18. あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしいと感じる。※
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にする。※
20. あなたは、恥ずかしくてどうにもならないと思うことがある。※
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になる。※
22. あなたの友達や知りあいのなかにあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき、あなたはそのことをある程度気にする。※
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたは割りと気になる。※

（※印のついた項目は逆転項目）